

平成20年度学校経営計画に対する最終評価報告

石川県立七尾高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 学習習慣の育成と教科指導力の強化  自主的・計画的な学習態度の育成に努め、平日の家庭学習3時間以上の割合90%以上を目指す。	LHや個人面談等により自主的・計画的な学習の取り組みを指導する。	計画を立てて学習に取り組んでいる。 A ほぼ日常的に計画を立てて学習している B 週に半分程度は計画を立てて学習している C 計画的に学習しているのは週に1回前後である D 計画的に学習するのはまれである	A 24.3% B 40.5% C 17.3% D 17.4%	A・Bの合計が64.8%。昨年同期より6.2%上昇。6割を超え、やや改善が見られる。 本校の根幹をなす取組であるので、次年度もホーム担任・教科担任による個人面談を継続し、また、保護者の理解・協力を得ながら粘り強く取り組む。
	生徒の学習状況や生活状況調査をもとに指導助言し、予習・復習を習慣づけるために家庭学習時間を確保させる。	平日の家庭学習時間を平均すると、 A 4時間以上である B 3時間以上～4時間未満である C 1時間以上～3時間未満である D 1時間未満である	A 29.2% B 33.7% C 34.8% D 2.0%	A + B = 62.9%。昨年同期より12.8%上昇。6割を超え、改善が見られる。本校の授業を十分理解するには、家庭学習時間3時間は必要である。次年度もホーム担任・教科担任を中心に課題等の回収の徹底を図り、生徒には、教務課が実施している「生活実態調査」を利用して生活を見直させる取組を継続する。
学習習慣の育成と教科指導力の強化  教師相互の計画的・恒常的な授業研究・授業評価・授業公開・互見授業を実施し更なる教科指導力の向上を図る。	生徒の学習到達度や授業理解の程度を常に把握し、その都度授業の内容や進度を改善し、生徒にとって分かりやすい授業を展開する。	先生の授業は分かり易く充実している。 A どの先生の授業も分かり易く充実している B 分かり易く充実した授業をする先生が多い C 分かり易く充実した授業をする先生は半数程度である D 分かり易く充実した授業をする先生は少ない	A 16.0% B 66.0% C 15.1% D 2.1%	A + B = 82.0%。昨年同期より13.7%上昇。改善が見られる。授業の工夫は教員の本分であるので、A評価の割合を増やすことを目標に次年度も取り組む。
	教科指導力の向上を目指し研究授業・授業公開・互見授業・教科指導研究会を年間4回以上実施する。	授業改善のために、校内の研究授業や授業公開、互見授業、中学校への授業参観及び教科指導研究会等に A 年間5回以上参加している B 年間4回参加している C 年間3回参加している D 参加したのは年間2回以下であった	A 42.9% B 36.7% C 14.3% D 0.0%	A + B = 79.6%。A・Bの合計は次第に上昇し、ここ数年は、8割前後で推移しているため、通常業務に移して取り組む。
	教職員の資質向上のため各種研修に参加し、スキルアップに取り組む。	各種校内、外の研修の参加により、 A 大きくスキルアップできた B ある程度スキルアップできた C スキルアップにつながらなかった D 一度も研修に参加しなかった	A 24.5% B 73.5% C 0.0% D 0.0%	個人のスキルアップにとどまらず、教科全体の指導力が向上するよう、教科内での研鑽にも努めなければならない。A・Bの合計は次第に上昇し、ここ数年は、ほぼ100%で推移しているため、通常業務に移して取り組む。
学習習慣の育成と教科指導力の強化  生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を研究工夫することで全ての生徒に対応した有効な指導法を確立する。	生徒の習熟度に応じた授業や課題の質・量を工夫するための学年会議、教科会議を適宜開く。	各教科における課題は、他の教科とのバランスを A 配慮して出されている B おおむね配慮して出されている C あまり配慮して出されていない D ほとんど配慮して出されていない	A 17.5% B 43.2% C 29.8% D 9.4%	上段資料では、生徒評価A + B = 60.7%で、昨年同期より6.2%上昇、やや改善が見られる。しかし、教師側の取組の努力(下段資料：教師評価A + B = 100%)ほど生徒には伝わっていない。今後も学年間、教科間でより密に連携をとる必要があるため、継続して取り組む。
		生徒に与える課題の量・質を工夫するための学年会議、教科会議が A 適切に開かれている B ある程度適切に開かれている C あまり開かれていない D 全く開かれていない	A 71.4% B 28.6% C 0.0% D 0.0%	

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
		習熟度授業は学力向上に向け効果的である。 A 習熟度授業に満足しており、学力向上に十分つながっている B 習熟度授業にある程度満足しており、学力向上におおむねつながっている C 習熟度授業にはあまり満足しておらず、それほど学力向上に十分つながっているとは思えない D 習熟度授業は必ずしも学力向上につながっていない	A 32.3% B 49.2% C 13.5% D 3.6%	今年度、個に応じた指導を特に大切な重点目標に掲げて取り組んだ。その具体的取組の一つが習熟度授業の充実であり、A・Bの合計が81.5%であることは評価できる。次年度も、今年度以上に学年内、教科内の連携を密にすることと、教員各自が更なる習熟度授業の展開の仕方に工夫を凝らすことによって生徒の学力向上につなげ、A評価の上昇を目指す。
学校関係者評価委員会の評価		・C評価・D評価を付けた生徒に対し、どうであったらA・B評価になるのか、どうしてA・B評価にならなかったのかを直接尋ね、改善策の手がかりにするのも一つの方法ではないか。 ・1- 「先生の授業は分かり易く充実しているか」について、評価の高低だけでなく、実際に生徒の力をつけているかまで分析して取り組んでもらいたい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・C評価・D評価を付けた生徒に対し、自由記述欄にA・B評価にならなかった理由等を記入してもらい改善策の手がかりにする。 ・「生徒による授業評価」等をもとに授業改善の工夫を既に行っている。また、教師個人としてだけでなく、教科毎でも取り組んでいる。この取組をさらに強化する。		
2 規範意識の向上と自主性の高揚  目的意識の高揚と自律した生徒の育成のため、学年会・各分掌は組織的に自主性を高める指導に取り組む。	登校指導、街頭指導、全校集会時の講話等を通して基本的な生活習慣の確立や、マナーの指導に取り組み、自主性、自律性を高める。	本校の生活指導(服装・遅刻・無断欠席等に関する指導)は A 適切な指導を行っている。 B 概ね適切な指導を行っている。 C もう少し徹底して指導する必要がある D 全く適切な指導とはいえない	A 34.2% B 51.3% C 6.6% D 0.7%	A + B = 85.5%。A・Bの評価が高い。A評価の上昇を目指す、取組を継続する。
	HR活動、生徒会活動、部活動を通して自主性、目的意識を高める。	生徒会活動やHR活動を充実させるための指導方法について A 十分検討され工夫・改善がなされている B ある程度検討され工夫・改善がなされている C それほど工夫・改善されていない D ほとんど工夫・改善されていない	A 26.6% B 70.4% C 2.1% D 0.0%	A + B = 97.0%。次年度は、生徒会活動の状況を保護者や生徒に知らせる工夫も視野に入れ、A評価の割合を増やすことを目標に取り組む。
		部活動を通して、進んで物事に取り組む姿勢が A 身につけてきた B 十分とはいえないが、身につけてきている C あまり身につけていない D 全く身につけていない・部に所属していない	A 34.7% B 35.4% C 9.6% D 20.0%	A + B = 70.1%。文武両道を目指す本校としては、A評価を更に増やしたい。次年度は、部活動の状況・結果を保護者や生徒に知らせる工夫も視野に入れて取り組む。
規範意識の向上と自主性の高揚  生徒と深く関わり人間としての「在り方・生き方」を考えさせることで規範意識や帰属意識・共生意識を育成する。	文化・芸術にふれたり、奉仕活動・ボランティア活動の体験により「在り方・生き方」を考えさせる。	文化・芸術に触れたり、奉仕活動・ボランティア活動に参加する機会は A 十分設けられている B ある程度設けられている C 少ない D 全くない	A 15.3% B 55.1% C 22.5% D 7.2%	A + B = 70.4%。昨年同期より24.4%上昇。改善が見られる。行事に対し、生徒がどうしたら奉仕・ボランティアの意識を持って取り組めるか、手だてを考え指導する必要がある。A評価の上昇を目指して、継続して取り組む。
	生徒理解に係わる講習会・研修会への参加と、校内研修会の実施により、教員の資質向上に取り組む。	悩みや意見がある時は A 必ず先生に相談している B 時々先生に相談することがある C 先生に相談することはまれである D 先生に相談することはない	A 29.7% B 47.6% C 16.8% D 5.7%	A + B = 77.3%。昨年同期より4.8%上昇。やや改善が見られる。欠席の目立つ生徒もいるので、継続して取り組む必要がある。
学校関係者評価委員会の評価		・2- 「悩みや意見がある時は先生に相談しているか」において、C・Dと評価しても他に相談する相手がいればそれはそれで可とできる。一方で、C・D評価をした生徒のうち、相談する相手がいなくて孤立している場合も考えられるので、そのような生徒がいらないか見つけ出す工夫が必要である。 ・インターンシップなどを利用して、奉仕・ボランティアの気持ちを育てて欲しい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針		・個人面談等の場面を利用して生徒の悩みなどを聞き取り、相談する相手がおらず孤立している生徒の早期発見に努める。 ・インターンシップ事前研修において、奉仕・ボランティアの精神の大切さも指導する。		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
<p>3 キャリア教育の推進と自己実現能力の育成</p> <p>キャリア教育を意識した授業を展開し、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力を育成し、社会人としての資質を身に付けさせる。</p>	<p>全教員が日々の授業において意識的にキャリア教育を実践する。</p>	<p>キャリア教育の観点を意識して日々の授業を</p> <p>A 恒常的に行っている B 時々行っている C 行うことはまれである D 全く行っていない</p>	<p>A 16.3% B 69.4% C 10.2% D 0.0%</p>	<p>A + B = 85.7%。昨年同期より19.7%上昇。改善が見られる。今年度から実施したインターンシップとも合わせ、全教科でキャリア教育の観点をより明確にした授業を実践しなければならない。次年度、A評価の上昇を目指して、継続して取り組む。</p>
<p>キャリア教育の推進と自己実現能力の育成</p> <p>進路学習や講演会、個人面談等により進路意識を啓発して早期に目標を掲げて進路実現を目指す態度を育成し、受験校(第一志望校)出願時の満足度90%以上を目指す。</p>	<p>個人添削等の指導を継続、強化して受験に必要な学力をつけさせることで、生徒が希望する第一志望校に出願させる。</p>	<p>出願した第一志望校に</p> <p>A 満足している B だいたい満足している C あまり満足していない D 全く満足していない</p>	<p>A 45.5% B 35.3% C 13.8% D 5.4%</p>	<p>2月10日、3年生全員にアンケートを実施 3年生が、これまでの自身の勉強と学校の進路指導を振り返り、出願時点で本校の指導と自分自身の取組にほぼ満足している生徒が80.8%であった。昨年度より約4%下降したのは、センター試験が難化したため志望校を変更せざるを得ない生徒が出たことも一因と思われる。これまでの指導の方法・方向も検証し継続して取り組む。</p>
<p>キャリア教育の推進と自己実現能力の育成</p> <p>教科研究会や難関大学二次試験問題解法研究会等の充実による教職員のスキルアップおよび個別指導体制等を充実させる。</p>	<p>難関大学二次試験問題解法研究会を各教科で実施し、教科指導力を高めるとともに、個別指導体制を整備して添削指導に当たる。</p>	<p>難関大学二次試験問題解法研究会は教科指導力を向上させるために、</p> <p>A 大変有意義であり、指導力向上に役立っている B 有意義であり、ある程度指導力向上に役立っている C あまり意義は感じられず、指導力向上に役立っていない D まったく無意味である。</p> <p>到達度の高い生徒に対して、難関大学合格のために必要な学力を</p> <p>A 十分つけることができた B ある程度つけることができた C それほどつけることができたとはいえない D ほとんどつけることはできなかった</p>	<p>A 46.9% B 49.0% C 0.0% D 0.0%</p> <p>A 12.2% B 69.4% C 10.2% D 2.0%</p>	<p>A + B = 100%。A・Bの合計は次第に上昇し、ここ数年は、9割以上で推移しているので、通常業務に移して取り組む。</p> <p>A + B = 81.6%。A評価の上昇を目指して、継続して取り組む。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>		<p>取組、分析及び改善策など適切であり特に問題なし。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策</p>		<p>計画通り取り組む。</p>		

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果 (無回答は表示なし)	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
<p>4 特色ある教育活動とSSH事業による人材育成</p> <p>学校設定科目や課題研究、海外研修等を通して、事象を科学的に探求する論理的な思考力と創造性・独創性や英語活用能力を育成し、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成を目指す。</p>	<p>本校理数科教育にふさわしい学校設定科目や課題研究、海外研修等の在り方を研究・工夫する。</p>	<p>二期SSH事業のねらいの一つである「国際化」に関わる教材開発や指導法改善が</p> <p>A 適切に行われている B ある程度適切に行われている C あまり行われていない D 全く行われていない</p>	<p>A 61.2% B 34.7% C 4.1% D 0.0%</p>	<p>A + B = 95.9%。国際化に向けた授業やシンガポール研修が、昨年度より充実したものになってきている。 次年度も、シンガポールの高校生を受け入れる際に工夫を凝らし、「国際化」に対応したい。継続して取り組む。</p>
<p>特色ある教育活動とSSH事業による人材育成</p> <p>小中学生や地域にSSH事業を広報し、その成果を普及することによって本校理数科への理解を図る。</p>	<p>体験入学、出前授業、SSH通信や小中学生体験教室等により、SSH活動および成果を近隣の中学校・保護者等へ広報する。</p>	<p>近隣の中学校への広報活動の成果が、理数科志願者の増加となって</p> <p>A 十分に表れている B ある程度表れている C 少ししか表れていない D ほとんど表れていない</p>	<p>A 18.4% B 49.0% C 30.6% D 2.0%</p>	<p>A + B = 67.4%。昨年同期より18.6%下降。 平成20年度入試において理数科志願者が少なかったことを受け、平成20年6月下旬から7月上旬にかけて、能登全域の中学生とその保護者を対象に説明会を計8地区で実施した。平成21年度入試における理数科志願者数は、2月24日現在、理数科専願入学希望者5名、併願同68名となり、説明会の取組が理数科志願者の増加につながったと考える。今後もあらゆる機会を利用して広報に努める。 (教職員による後期の評価が、平成20年12月に実施されたため、その時点では、平成21年度入試における理数科志願者数は不明であり、したがって、前述の説明会の取組が理数科志願者の増加に有効であったか判断がつかず、A + Bの評価も前年同期に比べて低かったものとする。) 次年度は、教職員による後期の評価を、平成22年度入試における理数科志願者数が確定した後、3月上旬に実施する。</p>
	<p>授業、教科研究会、学校行事および普通科向けのSSH事業を展開し、これまでの成果を全校的なものにする。</p>	<p>SSH事業の研究開発の成果が、全校に</p> <p>A 十分に還元されている B ある程度還元されている C 少ししか還元されていない D 還元されていない</p>	<p>A 26.5% B 63.3% C 8.2% D 2.0%</p>	<p>A + B = 89.8%。SSH事業の取組と成果の広報は、まず校内(本校普通科生徒)からという視点を明確にして次年度取り組む。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>		<p>・平成20年度に行った広報活動の成果が、平成21年2月24日現在理数科志願者の増加となって現れてきている。今年度の取組を継続して欲しい。 ・SSH事業の良さを、理数科生徒が出身中学へ出向いて後輩に直接伝えるのも効果があるのではないかと。</p>		
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針</p>		<p>・平成20年度に行った広報活動の取組を継続する。 ・理数科生徒が出身中学へ出向く機会を持てるか、中学の意向も考慮して検討する。</p>		